

Topic 83 グリーンビルディングの誕生と世界への広まり

メルマ担当、村上です。

今回は、グリーンビルディング(GB)の第一人者 Nigel Howard 氏*の論文⁽¹⁾にまとめられている GB 発展の背景などと、世界に広がるGBの様子を紹介します。

1. グリーンビルディング誕生と発展の背景

1990 年、イギリスにおいて、建築研究財団(Building Research Establishment)が建物の環境性能評価と認証のための評価システム“BREEAM (Building Research Establishment Environmental Assessment Method)”を開発した。これが、建物の環境性能を評価システムにより採点し、点数に応じた認証レベルを与える制度の始まりとされる。

面白いことに、というか、当然のごとくと捕らえるべきか、建物の環境性能を評価することのきっかけは、民間のディベロッパーが自社の物件と他社との差別化を図ったことによる。

この時期、建物のライフサイクルアセスメント(LCA)のための手順や基準も開発中であり、製品評価の手法を取り入れようとしていた。ところが、当時は建物の環境性能評価/認証と LCA は相容れず、結局、BREEAM のみ使い勝手の良いものとして認識され広まった。しかし、その後問題を克服し、現在 LCA は BREEAM に組み込まれている。

また、ISO14000 も同時期に発表され、後に欧州委員会への納入業者へ導入が義務付けられた。これによって、建物の設計・運用・管理を連携させる必要性が高まることとなった。

2. 世界の状況

イギリスに次いで、GB の制度を整えたのは米国。1993 年に米国グリーンビルディング協会(U.S.GBC:U.S. Green Building Council)が発足し、LEED (Leadership in Energy and Environmental Design)という評価システムを開発し認証制度の運用を始めた。上述のイギリスのディベロッパーの思惑と社会情勢がマッチして発展した GB の概念は、米国で花開き世界に広まった。現在、U.S.GBC の加盟するグリーンビルディングの世界的な組織“World Green Building Council (WGBC)”には、表-1 に示す加盟国がある⁽²⁾。この他、現在準備中の国として、アルゼンチン、コロンビア、ポーランド、南アフリカ、ヴェトナムがある⁽⁴⁾。

また、前述 Howard 氏の論文によると、香港には HK BEAM、韓国には Korean Green Building Label、フランスには Escale、フィンランドには PromisE、といった建物環境性能評価基準があり、それぞれ認証制度として活用されている。

認証制度ではないが、ヨーロッパ欧州委員会 (European Commission)は、商業ビル(ここでは住宅用ビル以外の意)を対象に Green Building Programme (GBP)を 2005 年に開始した⁽⁵⁾。GBP は、エネルギー費用対効果の良い商業ビル管理を目指して、各組織に自主的な取組みを促すもの。賛同組織は、Bank of America (UK 支店)などの国際的企業からイタリアの地方自治体まで、さまざまである。

表-1 WGBC メンバー

発足年	国	評価システム	組織
1993	米国	LEED	U.S.GBC
2001	日本	CASBEE	Japan Sustainable Building Consortium
2002	オーストラリア	Green Star	GBC Australia
2003	カナダ	LEED Canada	Canada GBC
2005	ニュージーランド	Green Star	New Zealand GBC
2005	台湾	EEWH	Taiwan GBC
2006	アラブ首長国連邦	LEED ⁽³⁾	Emirates GBC
2007	イギリス	BREEAM	UK GBC
不明**	ブラジル	LEED	GBC do Brasil
	インド	LEED-India	Indian GBC
	メキシコ	SICES(開発中)	Mexico GBC
	ドイツ	不明	Germany Sustainable Building council

ここで紹介したものが、全てではない(少なくとも、英語のウェブサイトが不十分な国のものはチェックできていない)ことを考慮すると、GB の人気ぶりが伺えます。

次号からは、GB の各国の仕組み/制度や実例などを紹介する予定です。

* イギリス人。BRE, U.S.GBC において制度作りに携わった人物。もともとは化学が専門。

** WGBC 及び各国組織の website を見る限り不明

出典

- (1) Howard, N. Building Environmental Assessment Methods: in Practice, SB05Tokyo, pp2008-2015, 2005
- (2) <http://www.worldgbc.org/council-development/member-green-building-councils> (2008/7/17, accessed)
- (3) <http://www.emiratesgbc.org/> (2008/7/17, accessed)
- (4) <http://www.worldgbc.org/council-development/emerging-green-building-councils> (2008/7/17, accessed)
- (5) <http://www.eu-greenbuilding.org/index.php?id=162> (2008/7/17, accessed)

(村上の独り言)

長野県南部の某村でファームステイをしたときにお世話になったお宅は、“これぞ昔ながらの日本家屋！”といった趣のお家だった。江戸時代末か明治初めに建てられたというお宅は、現代風にリフォームされ、古さと新しさが融和する。

最高気温が 30 度を越えた日があった。果樹園での午前中の仕事を汗だくになって終え、昼食を取りに家に戻ればひんやりと涼しい。天井が高く、広々として、襖や戸を開ければ大きな風の通り道ができる。外の暑さを感じさせない家に感激する私たちに、ご主人は“この家にはクーラーがない”、“熱帯夜なんか体験したことない”と自慢する。

ここで、同行した友人の素朴な疑問。

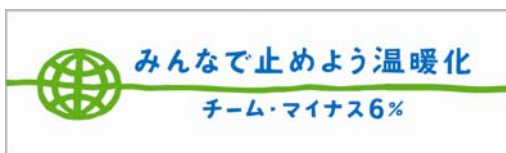
友人：東京でこんな家できないの(時折私から GB の話を聞かされているため、期待満々の眼で尋ねる)？

私：え？無理でしょう。東京とここでは、環境が違いすぎる。ここは、舗装されているのは道路だけで、それすらまばら。家は密集しておらず、家の周りには果樹園が配置されていて、風をさえぎるものがない、緑も多い。ヒートアイランド現象なんて起こらない…

友人：ふーん(失望の色を隠せない)、東京でもできればいいのに。

私：…(おっしやるとおり)

安全性とか、経済性とか、考えなければいけない問題がたくさんあって、東京ではクーラー要らずの快適な家なんて、無理なのでしょうね…でも、なんとか少しでも改善できないものでしょうか。良い策をご存知の方、教えてください。



イー・アール・エスはチーム・マイナス 6%に参加しています。